

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：34503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K12036

研究課題名(和文) 糖尿病患者の主体的な生活を支える連続性を基盤とした看護教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a nursing education program focused on continuity to support subjective life arrangement of people with diabetes.

研究代表者

河井 伸子 (Kawai, Nobuko)

大手前大学・国際看護学部・教授

研究者番号：50342233

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、糖尿病看護の実践に携わる看護師が、患者が生活調整という変化の中で自己のつながりを維持しながら主体的に生活を営むことを支援する「連続性を基盤とした看護実践」を行うことを促進する看護教育プログラムを開発することである。先行研究で開発した連続性を基盤とした看護実践評価指標の有用性・臨床適用可能性を検証した後、結果を踏まえた評価指標の洗練を行い、看護師が実践で活用できるよう、指標をツール化を行った。評価ツールは、clinical judgement(気づき 解釈 関わり 省察)の枠組みを基盤とし、看護師が連続性に着目でき、それを実践に生かすための視点の育成を目指すツールへと洗練した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

連続性を基盤とした看護実践評価指標の有用性・臨床適用可能性が検証され、ツール化されることで、臨床の看護師は、糖尿病患者の過去・現在・未来に渡るつながり(連続性)を把握しそれを支える支援のあり方を検討できる。また、看護師はその主体的な生活の営みを支援する方向へと看護実践を発展させることが可能となり、患者が生活を主体的に営むことを導く。このような支援によって患者が主体的に見出した生活調整は、自己の流れに沿った自然体で実行可能な生活調整となるがゆえに継続可能なものとなり、ひいてはこの生活調整の継続が合併症進展の抑制をもたらすことにつながる可能性を秘めていると考える。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to develop a nursing education program to promote nurses involved in diabetes nursing practice to perform 'continuity-based nursing practice' that supports patients in maintaining their self-continuity and living subjectively in the changing context of life arrangement. After verifying the usefulness and clinical applicability of the continuity-based nursing practice evaluation indicators developed in the previous study, the evaluation indicators were developed into a evaluation tool for nurses to use in their practice. The evaluation tool was based on the framework of clinical judgement (awareness interpretation involvement reflection) and refined into a tool that enables nurses to focus on continuity and aims to develop a perspective to understand a patient's continuity and use this in practice.

研究分野：臨床看護学

キーワード：糖尿病 生活調整 連続性 評価ツール

1. 研究開始当初の背景

平成 19 年度「健康日本 21」中間評価報告書¹⁾によると、糖尿病有病者数は 740 万人と増加している。また糖尿病性腎症により新規に透析導入となった患者数は目標値を上まわり 13920 人となり、糖尿病合併症についてはさらなる増加が懸念されている。また平成 19 年度厚生労働白書²⁾においても、生活習慣病に対する医療費が全体の 3 割を超え、糖尿病に係る医療費は 1.9 兆円になるなど、糖尿病患者の QOL の維持および医療費の適正化の面から、糖尿病の一次予防対策のみならず糖尿病患者の合併症進展など重症化抑制の戦略の確立が求められている。

糖尿病看護において、いかに患者の生活習慣における行動変容を促進し、継続することを支援できるかに多くの力がそそがれてきた。その中で、糖尿病とともに生きる生活はただより良い生活習慣となるよう行動変容するのみならず、どのような自分であり続けたいのか、病気と自分の人生にどう折り合いをつけていくのかといった生きる営みの再考を迫られることなど、糖尿病という病気の持つ慢性性という特徴に注目することの重要性が周知されるようになってきている。

しかしながら、慢性性という特徴を踏まえた包括的な指標が求められているという報告³⁾にもあるように、生活に対する満足感や負担感など生活に対する思いなどの尺度は開発されているものの、折り合いや生きる営みの再考についての包括的な指標は開発されてきておらず、看護師は生活の変化や折り合いのつけ方が本当に患者に添う、その人らしい生活になっているのか悩みつつ判断しながら支援を行っている現状がある。

2 型糖尿病とともにある人が変化の中でどのようにその人らしい生活を送っているのかをみる視点として Atchley (1999) が提唱した変化の中でのつながりという意味を持つ連続性という概念に着目した一連の研究の中で、2 型糖尿病とともにある人が連続性の感覚を持つことは自己の過去－現在－未来が一つの流れとして感覚され、その流れの中で現在の自己を再考し、それを通して主体的な生活調整を行うことにつながることで、またその生活調整は自己の流れに沿っているがゆえに患者にとっては自然体で実行可能なものと感じられることが示された。すなわち、現在の生活が自然なものとしてその人の自己の流れの中に位置づき、過去の経験や将来の展望のもとに自身で生活調整を行うといった主体的な営みとしての生活につながることを示唆された。

またそのような連続性の感覚をもち主体的な生活を営むことを支援する看護実践は従来から行われたような変化に着目し、望ましい変化を導く、あるいは変化への適応を促進するという変化に重点をおくのではなく、変化の中で保たれるもの・つながり(連続性)に視点を移し重点を置く必要があることが明らかとなった。さらに連続性に着目した看護実践は、ただ連続性を評価するだけで望ましい調整方法が見出されるわけではなく、患者と共に連続性を見出しつつ、生活調整方法を患者主体で試行錯誤の中から見つけ出し、その生活調整による連続性の変化を見出すという循環する過程が必要であることが示された。これらの結果から、応募者は患者の連続性をアセスメントし自身の実践のあり方を検討する看護実践評価指標を開発した⁶⁾。今回の研究では、開発した連続性を基盤とする看護実践評価指標の有用性・臨床適用可能性を検証し評価指標をツール化すると共に、評価指標を活用した連続性を基盤とする看護教育プログラムを開発することで、看護師が、糖尿病患者の過去 現在 未来に渡るつながり(連続性)を把握し、その流れからみたり全人的・包括的に生活調整をとらえ看護援助を発展させることを可能とする。そのことにより、糖尿病患者が自己のつながりを維持し、生活調整を主体的に営むことを可

能とする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、糖尿病看護の実践に携わる看護師が、患者が生活調整という変化の中で自己のつながりを維持しながら主体的に生活を営むことを支援する「連続性を基盤とした看護実践」を行うことを促進する看護教育プログラムを開発することである。開発する看護教育プログラムは、以下の3点を目的とする。

- 1) 連続性を基盤とした看護実践評価指標の有用性・臨床適用可能性の検証とツール化
- 2) 連続性を基盤とした看護実践の促進・阻害要因、看護実践に必要な能力の抽出
- 3) 糖尿病患者の主体的な生活を支える連続性を基盤とした看護教育プログラムの開発

しかしながら、研究期間内に、研究者の療養、教員欠員による教育へのエフォートの高まり、COVID-19 感染拡大に伴う医療現場の逼迫、看護師の業務負担等により、ツールを用いた試行が行えず、2)、3)の目的達成には至らず、今後継続していく予定である。

3. 研究の方法

1) 連続性を基盤とした看護実践評価指標の有用性・臨床適用可能性の検証とツール化

応募者が開発した連続性を基盤とした看護実践評価指標の有用性・臨床適用可能性を検証した後、結果を踏まえた評価指標の洗練を行い、看護師が実践で活用できるよう、指標をツール化することを目的として以下を行った。

評価ツール(案)の作成

先行研究結果および文献検討により、評価指標のツール化を行い、評価ツール(案)を作成した。

評価ツール(案)の臨床適用方法の検討

当初、の結果を元に、糖尿病患者への実践を行っている看護師に対して連続性を基盤とした看護実践および評価指標に関する勉強会を定期的に行い、勉強会での討議内容および勉強会終了後の看護師へのインタビュー結果から、評価指標の臨床適用可能性を検討し、評価指標の臨床適用方法を検討する予定であったが、研究者の療養、教員欠員による教育へのエフォートの高まり、COVID-19 感染拡大に伴う医療現場の逼迫、看護師の業務負担等により、勉強会が開催できず、専門家会議により、適用方法の検討、評価ツールの洗練を行った。

4. 研究成果

評価指標の有用性の検証および評価指標のツール化

評価ツール(案)の作成

先行研究で明らかとなった評価指標の構成要素を基に、評価ツール(案)の作成を行った。評価ツールは、【変化度:生活調整の中での変化】【持続性:自己像の維持】【統合:自己と生活調整の相互浸透】【受容度:打開できない者の受け入れ】【掌握度:人生の道のりの見通し】【志向性:生活調整での関心の向き様】【関連性:出来事とのつながり合い】の7要素を構造的に把握することが出来るよう、各要素のアセスメント内容・評価の視点を具体的に示し、それに基づき必要な情報が取れているかを看護師が確認できるようにツール化した。

評価ツール(案)の適用可能性の検討

先行研究で明らかとなった臨床適用に向けての課題(チェックするのではなく、アセスメント内容や看護実践の変化内容を記入できるものとする必要がある) 連続性という概念への理解

が難しく、評価項目が何を意味しているかが伝わりにくい。評価の構成要素をいくつ把握できたかではなく、それらを統合することで患者の全体像が分かり、看護実践につながる。活用方法として、個人が看護実践を振り返るといふより、カンファレンスなどで、複数の看護師が情報を持ち寄り記入していくことで、患者理解が広がり発展する)を基に、作成した評価ツール(案)と文献検討結果から臨床適用可能性を検討した。その結果、評価指標内容をアセスメント・評価を行ったかどうか、患者理解の有無を評価するツールではなく、看護師が連続性に着目でき、それを実践に生かすための視点の育成を目指すツールの必要性が明らかとなった。それらの示唆を基に、専門家会議を行い、連続性に着目した看護実践は、従来より幅広く適用されている看護過程(情報収集 アセスメント 計画 実施 評価)の枠組みではなく、clinical judgement(気づき 解釈 関わり 省察)の枠組みを基盤として実践の枠組みを発展させることが重要であることが示唆された。

評価ツール(案)の洗練

適用可能性の検討から、評価ツールは、看護師が聞き取った情報を書き込み全体像を把握できるような書き込み式のものに形式を変更した。また、ツールの洗練の過程で、アセスメント・評価の視点だけでなく、連続性に着目した看護実践内容は、従来の療養支援と比較して特徴的な実践があることが示唆されたため、看護実践の在り方もツールに盛り込むことで、臨床看護師が患者理解や評価にとどまらず、実践内容も参照でき、自身の実践に取り入れられ実践適用性が高まるようにツールのさらなる洗練を行った。

引用文献

- 1) 厚生科学審議会地域保健健康増進栄養部会：「健康日本21」中間評価報告書、2007、http://www.kenkounippon21.gr.jp/kenkounippon21/ugoki/kaigi/pdf/0704hyouka_tyukan.pdf
- 2) 厚生労働省：平成22年度厚生労働白書、2011、<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/10/>
- 3) 森川浩子：日本における糖尿病自己管理アウトカム指標の開発 平成15・16年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書、2005
- 4) 河井伸子、2型糖尿病とともにある人の連続性(Continuity)、平成16年千葉大学大学院看護学研究科修士論文
- 5) 河井伸子、2型糖尿病とともにある人の連続性に着目した看護実践モデルの開発、平成21年千葉大学大学院看護学研究科博士論文
- 6) 研究代表者：河井伸子 平成24~26年度(基盤C) 2型糖尿病患者の主体的な生活を支える連続性を基盤とした看護実践評価指標の開発

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 河井伸子
2. 発表標題 2型糖尿病患者の連続性に着目した看護実践のための視点の抽出
3. 学会等名 看護質的統合法（KJ法）研究会 第9回研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河井伸子
2. 発表標題 糖尿病患者の連続性に着目した看護実践評価ツールの開発における質的統合法（KJ法）の活用 「質的統合法（KJ法）」の質的研究の可能性を考える 科学的質的研究に向けて
3. 学会等名 質的心理学会 第15回大会 会員企画シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河井伸子
2. 発表標題 糖尿病患者の連続性に着目した看護実践評価ツール
3. 学会等名 中国医科大学第一病院（瀋陽（中国））でのセミナー
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河井伸子
2. 発表標題 セルフケアと連続性（Continuity）
3. 学会等名 第27回日本糖尿病教育・看護学会 学術集会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 黒田 久美子 (編集), 清水 安子 (編集), 内海 香子 (編集)、河井伸子他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 265
3. 書名 セルフケア支援 (看護判断のための気づきとアセスメント)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	黒田 久美子 (Kuroda Kumiko) (20241979)	千葉大学・大学院看護学研究院・准教授 (12501)	
研究分担者	高橋 良幸 (Takahashi Yoshiyuki) (30400815)	東邦大学・健康科学部・准教授 (32661)	
研究分担者	正木 治恵 (Masaki Harue) (90190339)	千葉大学・大学院看護学研究院・教授 (12501)	
研究分担者	大原 裕子 (Ohara Yuko) (10782146)	帝京科学大学・医療科学部・准教授 (33501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------